

## ジャイナ教における女性解脱論

長 尾 聖 生

ジャイナの二大宗派である空衣派 (Digambara) と白衣派 (Śvetāmbara) は女性の解脱 (strinirvāṇa) という問題に関して全く異なった見解を有する。すなわち、空衣派が女性に解脱の可能性を断固として認めないのに対し、白衣派はこれを積極的に指示する。この問題を含め、対立が始まった時期は定かでないが、紀元前 2・3 世紀頃までには両派の分裂は決定的なものになっていたとされる。両派にはいくつかの見解の相違があるが、分裂の最大の要因となったのは僧の衣服着用に関するものであろう。空衣派による衣服の放棄は Mahāvīra の裸形実践に起因している。彼の説いた不所持の訓戒を精神的のみならず外面的にも遵守するべく彼に倣って裸形を実践する空衣派僧は、弘子などの例外を除いて全財産を放棄すべきであると考えている。裸形を解脱に不可欠なものとみなす彼らは、それ故、白い布を身に纏った白衣派僧に対して禁欲を守っている在俗信者以上の評価を与えようとはしない。勿論、白衣派も Mahāvīra による裸形の実践を認めている。しかしながら、不所持を精神的な問題—私のもの (mamatva) という観念 (執着心) がなければ、何かを所持していたとしても、訓戒が禁ずる所持 (parigraha) にはあたらない<sup>1)</sup>—と考える彼らは、裸形が Mahāvīra の時代には賞賛に値するものであったとしても、この墮落した時代においては賢明なものではないとして非難し、修行を助ける手段 (upakaraṇa) としての衣服の必要性を主張する。最大の争点であるこの問題は、尼僧の衣服着用が Mahāvīra の教示であるが故に、女性解脱論争においても常に中心的な位置を占め、上述の見解の相違に基づいて両派の主張を正反対のものにしている。それ故、衣服問題は女性解脱論争の核をなしているが、この論争には他にも他にも数多くの争点がある。例えば空衣派は、最も苛酷な地獄である第七の地獄 (saptamapṛthivi) へ転生しないことを理由に、女性が解脱する可能性を否定する。対する白衣派は、女性に第七の地獄へ転生する能力がないことに関しては同意するものの、これに解脱との関連性を認めない。

このような議論の軌跡を、我々は残存する諸文献を通じて辿ることができる。

具体例として、三つの文献を紹介するとともに、この問題を根拠とした女性解脱論争がどのような発展を遂げたか、簡単にふれておきたい。以下は空衣派の論証式である。

〈論証式 1〉【主張】女性には解脱が存在しない。【証因】第七の地獄へ行くことがないから。【喩例】凝集によって生まれるもの (saṃmūrchima)<sup>2)</sup> などのように。<sup>3)</sup>

〈論証式 2〉【主張】解脱の原因となる [正] 知などの究極の卓越は女性達にはない。

【証因】究極の卓越であるから。【喩例】第七の地獄へ行くことの原因である不徳の究極の卓越のように<sup>4)</sup>。

女性解脱論としてまとまった記述をした最初の書は、白衣派と同じく女性に解脱を認める Yāpaniya 派学僧 Śākatāyana (814-867) の *Strinirvāṇaparakaraṇa* である。

〈論証式 1〉はこれに記載されている。この作品に反論を唱えたのは空衣派の Prabhācandra (10-11 世紀) であり、彼は *Nyāyakumudacandra* の女性解脱論において、〈論証式 1〉による主張を形勢不利と考えたのか、これを訂正するという趣旨の言明をなしている<sup>5)</sup>。これらの内容を汲んで著されたのが白衣派学僧 Ratnaprabha (12 世紀) の *Ratnākarāvātārikā* における女性解脱論であるが、ここには先の言明を受けて再構築した〈論証式 2〉が記載されている。

このように次第に発展を遂げてはいるものの、一連の議論は基本的には同じ形で残っており未だ解決には程遠い。また、女性の解脱を否定するために空衣派によって持ち出された議論は非常に多様で、そのことは女性解脱論が煩雑なものであるという印象を与えている。しかしながら、*Ratnākarāvātārikā* の登場によって我々は争点をより容易に理解することが出来るようになった。なぜなら、それ以前の女性解脱論が両派の見解を交互に並べた対論形式のみで進められていたのに対し、*Ratnākarāvātārikā* では以前は個別に論じられていた事柄を各議論の始まる前に題目を設定するかのような形で分類し、その中でも重ねて区別して、各末端部分をつぶさに論破していくという新たな論法が用いられているからである。議論の基点となるのは、空衣派の女性解脱否定論証式である。

【主張】女性には解脱がない。【証因】男性よりも劣っているから。【喩例】中性の人 (napuṃsaka) などのように<sup>6)</sup>。

この論証式を幹として議論は枝別れの様相をとり細部まで吟味される。枝別れの始まりとして証因である女性の劣等性に関する理由が提示される。すなわち女性の劣等性を立証するために空衣派が言及するのは、1) 正見などの三宝がない、2) 特別な能力がない、3) 男性に敬われない、4) 聖典の伝承者でない、5) 偉大な

卓越した力を持たない、6) まやかしなどに長けている、のいずれかであることが想定される<sup>7)</sup>。各理由はさらに分類される。例えば、女性が特別な能力を持たないという説は、a) 七番目の地獄に転生しない、b) 討論術などの能力がない、c) 聖典の知識があまりない、d) 苦行によって業から逃れる力がない、のいずれかに言及したものであるとされる<sup>8)</sup>。a) ～d) のような末端部分を検証することで大本となる論証式の証因が妥当性を欠いたものであることが立証されるのだが、このような論述方法は白衣派の主張の堅固さを印象付けると共に、争点を明確にする役割も果たしている。

このように非常に綿密な議論の末、白衣派は女性が男性に劣るとする空衣派の説を退けるのだけれども、劣る理由として言及された女性に対する否定的な見解そのものに関しては、これを全面的に否定しているわけではない。例えば彼らは、聖典に関する知識の不足や討論術の能力の欠如、力の弱さなど、あまり喜ばしくない特徴を女性に認めることを否定しない。道徳的に特に優れた女性や虚弱な男性の存在に言及することで、女性の解脱能力を弁護すると同時に、女性に与えられた否定的特徴を受け入れているのである。

*Ratnākaraṅgīyā*に限らず、何世紀にも及ぶ女性解脱論争で女性を擁護する姿勢を堅持し続けていることから、我々は白衣派が女性に男性と同等の能力あるいは権利を認めているかのように錯覚しがちであるが、彼らが空衣派の示す女性観そのものを否定しているわけではないという点に注意すべきである。Jaini [1991] を参考にすれば、仏教やジャイナ教といったいわゆる異端の宗教は、女性の出家を認めることによって彼女達が精神的に進歩する可能性を示唆したものの、伝統的な男性優位思想から脱却することはなかった。それどころか、世俗の断絶に固執するあまり、彼らの女性に対する嫌悪はバラモン教やヒンズー主義のテキストから窺えるそれよりも強烈なものとなった。一般に身体的構造を理由とした女性批判は、彼女達の生殖機能、特に月経に由来するものが多いが、ジャイナ教は月経の禁忌のみならず独自の微生物学まで考案して女性を非難している。すなわち、女性の生殖器や両胸の間などには月経等が原因で莫大な数の微生物が生じ、宿主である女性の日常的な活動によって死滅する。さらに、これらの微生物の生殖器における活動が精神的な進歩の妨げとなる性的欲望を女性に喚起するとされている。微生物の死滅が不殺生戒に抵触するか否かの判断は別にして、この概念に見られるような女性に対する否定的態度は空衣派に限られたものではない。全てのジャイナ教徒は、いかさまや不正といった悪徳が女性として転生することの基本

的な原因であるという信念までも抱いている。

しかし、たとえ白衣派の見解がインドの一般的な女性観から完全に逃れたものでないにしても、この問題を常に論じてきたインド哲学派はジャイナ教以外に存在せず、それ故ジャイナ教の女性解脱論は非常に貴重で注目に値するものである。

最後に肯定派である白衣派の論証式を本稿の締めくくりとしてあげておきたい。

【主張】人間の女性という種は、誰か解脱に対する一切の原因を備えた個体が存在するという意味で、それ（解脱）を有する。【証因】出家生活に対する適性の故に。【喩例】男性のように。<sup>9)</sup>

(略号及び使用テキスト) NKC: *Nyāyakumudacandra*, ed. by Mahendra Kumar, Māṇikacandra Digambara Jaina Series No. 38-9, Delhi: Sri Satguru Publication, 1991<sup>2</sup> (1st ed. in 1961). RA: *Ratnākaraṅgavārikā*, ed by Dalsukh Malvania, 3Vols., L. D. Series No.6,16,24., Ahmedabad: L. D. Institute of Indology, 1965,1968,1969. SNP: *Strīnirvāṇaprakaraṇa*, ed. by Muni Jambūvijaya, Bhavnagar: Śrī Jaina Ātmānanda Sabhā, 1974. TAAS: *Tattvārthādhigamasūtra*, ed. and translated by J. L. Jaini, The Sacred Books of the Jains Vol. 2, New York: AMS Press, 1974<sup>2</sup> (1st ed. in 1920). なお、本稿の執筆にあたって次の文献を大いに参考にした。Jaini, P. S. [1991] *Gender & Salvation, Jaina Debates on the Spiritual Liberation of Women*, Berkeley: University of California.

- 1) See RA P. 96, SNP pp. 20-21, NKC p. 868.
- 2) 出生には三種類あり、胎生は性行為に基づいて胎児として生ずる者の出生、突発生は神や地獄人の出生、凝集生はそれ以外のものの出生であるとされる。See TAAS 2.32: *sammūrchanagarbhopapātā janma*//.
- 3) SNP p. 15: *asannirvāṇaḥ striyaḥ, asaptamaprthivīgamanatvāt,... /... yathā sammūrchimādayaḥ,... /*
- 4) RA p. 102: *nirvāṇakāraṇaṃ jñānādīparamaprakaraṇaḥ striṣu nāsti, paramaprakaraṇatvāt, saptamaprthivīgamanakāraṇā 'punyaparamaprakaraṇatvāt,... /*
- 5) See NKC p. 871.
- 6) RA p. 93. *strīṇaṃ mokṣaḥ. puruṣebhyo hīnavād, napuṃsakādivad iti*/See NKC p. 876.
- 7) RA p. 93: *kim samyagdarśanaḥdiratnatrayābhāvena, viśiṣṭasāmarthyāśattvena, puruṣānābhivandyatvena, smāraṇādyakartṭvena, amaharddhikatvena, māyādirakaraṇatvātvena vā /*
- 8) RA p. 97: *yatas tad api tāsāṃ kiṃ saptamaprthivīgamanābhāvena, vādātilabdhirahitatvena, alpaśrutatvena, anupasthāpyatāpārāñcitasūnyatvena vā bhavet /* See SNP pp. 15-16, NKC p. 876.
- 9) RA p. 102: *manuṣyastrijātiḥ kayācid vyktyā muktyavikalakaraṇatvāyā tadvatī, pravrajyādihikāritvāt, puruṣavat /* See SNP p. 17.

〈キーワード〉 ジャイナ教, 女性, 解脱

(広島大学大学院修了)